

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」 (マルコ 5: 41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第37号

2020年12月15日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65

日本聖公会管区事務所気付
正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL 03-5228-3171

発行責任者:金善姬(キムソンヒ)



司祭になって

帯広聖公会 副牧師

司祭 エリザベツ 阿部恵子(北海道教区)

主の平和がありますように。

8月22日、コロナ禍をぬうように司祭按手を無事にうけることが出来ました。感謝です。

早いものであれから3か月以上の時が経ち、改めて、ここまでの道のりを振り返ってみますと、17年前、苦しみの中にいた私は、光に向かって歩く道を探していました。「神様、この私にも誰かのお役に立てることはありますか」と小さな声でたずねたことを神は聞いてくださり、この度の按手に繋がることになったように思います。私達に現れる良き出来事は、神のご栄光の顕れとされますが、神のご栄光が表現されている言葉として、祈祷書には栄光の唱があります。そこには神は「わたしたちが求めた思うところの一切を、はるかに超えてかなえてくださる方」。

つまり、私が光を求めて歩いた道には、神がいつも共に居て、導き、私に力以上のものを下さったと考えることができるのです。

按手式において、欠けた器である私の頭に置かれた聖職の皆さんの手は、私が想像していた以上に重く、「いつまでも謙虚であれ」との神からの言葉と自戒していますし、この方達とこれから教区を歩むのだと感ずることができたのです。苦しみの中を手探り状態で光に向かって歩み続けてきた道ですが、勿論、司祭となって終えたわけではありません。反対にここから新たな導きが始まっていると言えると思います。按手式の翌日には管理司祭の補式を得て初ミサが行われ、それ以後は一人で行う聖餐式に、コロナ禍ということもあって緊張感もっています。特に聖卓の準備をし、聖品を分餐する時には、気を使いますが、その分、私達は主にあって一つの家族であるということが強く頭をよぎるのです。私達は互いに助け合い、補い合って一つの家族なのだ。主教や司祭はリーダーシップのあ

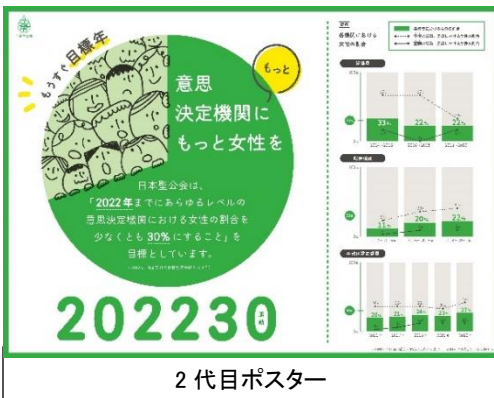
る父親的な存在と考えられていたことがあるかもしれませんが、私にジャンヌ・ダルクのような力がないことは私自身、よく理解しています。

しかし、私には心から信頼できる方がいらっしやいます。その方は「あなたの道を主に委ねよ。主が整えてくださる」と語りかけてくださいますので、私自身を、また教会の家族を委ねつつ私の前に行く光を見ながら歩み続けたいと願っています。

ジェンダーの視点から見た総会

司祭 クリストファー 永谷 亮(北海道教区)

日本聖公会第 65(定期)総会が 10 月 27 日～29 日に開催されました。私は北海道教区の聖職代議員として総会に出席する機会が与えられましたので、短く紹介させていただきたいと思います。今回の総会はコロナ禍にあって一堂に会する形ではなく Zoom を用いてのリモート参加による総会となりました。管区事務所、また書記局の丁寧で入念な準備によりスムーズな運営がなされましたことを感謝いたします。しかしながら、総会は議事以外にも出席者や陪席者との休憩や食事といった、議場を離れての交流も「聖公会と教会の今」を分かち合える貴重な時であると思いますので、早くソーシャルディスタンスやマスクが不要になって再び一堂に会して集まれることを待ち望みます。



まず今総会において、その出席者から、あくまでも数字としてのジェンダーバランスに触れておきたいと思います。はじめに主教議員ですが、こちらは全員男性のみ。続いて聖職議員は 22 名中、男性 19 人(86%)、女性 3 名(14%)、信徒代議員は 22 名中、男性 13 名(59%)、女性 9 名(41%) となっています。さらに、日本聖公会の 19 の諸委員会の委員長では女性は青年委員長の 1 名のみです。また、今回の選挙で選出された常議員における女性の数は、

聖職常議員では 1 名、信徒常議員では 2 名で、主教常議員を除く常議員 6 名のうち半数に女性が選出されました。これはあくまでも私見ですが、選挙で投票を行なった多くの議員の投票行為にジェンダーバランスへの意思と配慮があったのではないかと推察いたします。

このように、主教常議員を除く常議員の半数、信徒代議員においてはおよそ 4 割が女性となっていますが、聖職議員、諸委員会についてはさらなるジェンダーバランスが求められることと思います。一方、これまでの女性の社会的視点に基づくジェンダー(社会的性差)についての一般的な考え方はジェンダーバランスを扱う上では今後も有効で、「女性の数」をマークすることとその本質的意義の周知・共有・浸透も大切ですが、さらに、ジェンダーバランスは男女比だけを語るものではなく、ここには男性・女性と区別されるのを願わない人、またセクシュアルマイノリティの方々も含まれていること、つまり「性の多様

性」も忘れてはならないと思います。ジェンダーや性について、私たちが考えたりする時にはかつて(今も)女性がそうであったように「与えられていない権利」、「奪われている権利」があること、社会や教会において存在がないがしろにされていたり、差別や区別を受けている人びとについて認識を新たにするとともに、私たちと共同体にとって大切な課題として、誰もが自分らしくあることのできる、それが当然の社会となるよう願います。

さて、今総会の大きな議案に「日本聖公会法規の一部を改正する件」があり、全国の教区を3つの「宣教協働区」として協力関係を強化し、管理主教体制のもとで合併や再編に向け「伝道教区」となることを可能とする法規一部改正の議案が決議されました。今後、各教区間での交流や宣教協働が活発になると同時に「女性聖職」についても議論されていくことも避けられません。

また、2022年に「宣教協議会」が開催されることが決議されました。2012年の宣教協議会では「この世に仕える教会の形成のためには、様々な立場の人びとが、教会・教区・管区的意思決定機関へ平等に参画することが求められます。その一歩として、女性の比率が高まるよう働きかけ、2022年までに少なくとも30%の参画を実現し、さらに青年層の参画も推進します」という提言がなされ、2022年はそこで示された目標年です。私たちにはまだまだ多くの課題がありますが、収穫の実りが約束されていることに励まされながら、神様から与えられている賜物を互いに用いつつ一緒に汗をかいていきたいと思っています。

2020年女性に対する暴力の根絶を求めて祈る

管区女性デスク 司祭 セシリア 大岡左代子(京都教区)

昨年12月1日の礼拝後、早々と来年2020年も降臨節第一主日である11月29日に「女性に対する暴力の根絶を求めて祈る」礼拝の実施を決めましたが、2020年は思いもかけぬ感染症拡大の影響を受け、公開での礼拝はとりやめ礼拝の動画を配信することとなりました。その収録のため、担当者は11月3日(祝・火)に東京教区聖アンデレ主教座聖堂に集まりました。礼拝奉仕者は、司式者団：下条裕章司祭(東京教区)、笹森田鶴司祭(東京教区)、卓志雄司祭(管区宣教主事/東京教区)、大岡左代子司祭(管区女性デスク/京都教区)、説教者：上田亜樹子司祭(東京教区)、聖書朗読：中村真希聖職候補生(東京教区)、侍者：後藤務さん(東京教区)、奏楽者：八代紀子さん(東京教区)、聖歌独唱：高柳章江聖職候補生(東京教区)、という顔ぶれで、市原信太郎司祭(東京教区に出向/中部教区)が録画収録の労をとってくださいました。この『タリタ・クム』を読んでくださっている方々の中にはすでに配信された動画をご覧になり、祈りを共にしてくださった方々もおられることと思います。

今年の聖書箇所は〈士師記第19章22節～30節〉。中村真希聖職候補生(東京教区)が、ヘブライ語と日本語で朗読くださいました。この箇所を読めば「どうしてこんな酷いお話が聖書に収められているのか？」と誰しもが思うことでしょう。けれども『聖書』という書物にわざわざこのような物語が収められ語り継がれているのは、この物語の読み手がより深く、

また真剣にわたしたちの生活の中でおきる様々な「暴力」について考え、被害者の思いを想像し、また必要な行動をするようにとの呼びかけである、とあらためて思いました。説教後の沈黙のあと、アンセム「Jesus Walked This Lonesome Valley～イエスはこの寂しい谷を歩いて行かれた～」が奉唱されました。この聖書箇所の中で名前も知らされず、一言も発しないまま暴力の犠牲者となった女性と、ひとりで寂しい谷を歩まれるイエスの姿が重なり、わたし自身のなかでこみあげてくるものがありました。同時に、イエスは、孤立し、傷みの中にある人と必ず共にいてくださるはずである、と強く思いました。

この礼拝は、「世界のジェンダー暴力と闘う 16 日間キャンペーン(11 月 25 日～12 月 10 日)」に連帯し、4 年前から東京教区主教座聖堂の礼拝として実施されるようになりました。また昨年からは、管区女性デスク、正義と平和委員会ジェンダープロジェクトも共催で行うようになりました。聖公会のみならず、様々な女性に関わる機関が連携しています。「暴力」という言葉から連想されるのは、大方「身体的な暴力」なのかもしれません。けれども、暴力は「人の心と身体を傷つけるもの」です。身体的な暴力を受けたとき、わたしたちが傷むのは身体だけではありません。同時に「心」も傷つきます。暴言、無視、中傷、孤立させる、そのような身体的な暴力を伴わない「暴力」もどんなに人の心を傷つけるのでしょうか。また、「制度」によって特定の誰かを排除することも広い意味での「暴力」です。それはその人の尊厳を傷つけ、また心を傷つけるからです。暴力の犠牲者になるのは女性に限りません。けれども、あえて「女性に対する」と謳われているのは、あらゆる暴力を受けるのは圧倒的に女性が多いからです。その中には、当然、少女や女兒も含まれています。暴力防止に至るにはどんな方法があるだろうか？と考えますが、何よりも「見過ごしにしない」文化をつくることではないかと思えます。暴力は人間の手によって行われるものですから、人間の力によってその状況を変えることができるはずです。そして、暴力を用いても良い、という認識を改めること、暴力は相手の尊厳を傷つけること、暴力を用いる関係性は対等ではないこと、等々・・・あらゆる機会をとらえて、わたしたちは学びたいと思えます。また聖書に描かれている「暴力」にも向き合い、批判的に捉えつつテキストが語る「傷み」について考えていきたいものです。今後も「女性に対する暴力の根絶を求めて祈る」礼拝を継続し、教会が暴力に対して「NO」と言うように呼びかけて参ります。

最後に、一冊の本を紹介します。

太田 啓子著『これからの男の子たちへ～男らしさから自由になるレッスン～』大月書店、

2020 年 8 月 21 日発行

弁護士である著者が、ご自分の子育てを通して、また弁護士としての経験やご自分の経験から書かれたものです。ジェンダーによって規定される「男らしさ」は、暴力へのひとつの要因です。大人になってからそれまでにすりこまれてきたジェンダーバイアスを変革するのは難しく、やはり子どもの時からジェンダー平等の教育が必要だという思いで書かれています。関心のある方は、ぜひお読みください。長い目での「暴力防止」につながると思えます。

2020 NGO 日本女性大会にオンラインで参加して

グレース前島恵(NCC 女性委員会聖公会派遣委員/東京教区)

2020年11月8日(日)、昭和大学(東京都品川区旗の台)を会場に、国際婦人年連絡会が主催する2020 NGO 日本女性大会が開催されました。

国際婦人年連絡会は、1975年世界女性会議を契機に、女性の地位向上とジェンダー平等の実現をめざして連携し、全国的に活動する民間団体の集まりです。

「日本聖公会女性団体連絡協議会」(日本聖公会に連なる女性団体から構成され、女性デスクを世話人として、情報交換、課題の共有に努める集まり)は2015年よりこの会に加盟しています。

今回の大会は、会場参加とオンライン参加のハイブリッド方式で行われ、「日本聖公会女性団体連絡協議会」からは、実行委員の金子登美江さん(会場)、以下に報告を寄せてくださった前島恵さん(オンライン)を含む5名のメンバーが参加登録しました。

*閉会後の発表によると、参加者は会場で142名、オンラインは210名とのこと。

5年ごとに開催される本大会はどんな趣旨で開催されるのか、読者の皆さまでもご存じの方は少ないのではと思う。第4回世界女性会議(1995年中国、北京で開催)において、ジェンダー平等をめざす国際的な取組みに規範となる「北京宣言・行動綱領」が、採択され、これを記念して、5年ごとに過去5年の進捗と課題を世界

全体で振り返る取組みで、今回のテーマは「私たちは黙らない 女性の権利を国際水準に！」

ここから想像する言葉や事象は、#MeTooムーブメントあるいは年々低下する日本のジェンダー平等を何とか改善しなければならないという危機感であろうか。

午前中の分野別委員会の今後5年間の決意表明と基調講演(林陽子さん)、そして午後の3時間にわたる3人のパネリスト(浅井春夫さん、打越さく良さん、北原みのりさん)によるパネルディスカッションから学んだことの一つは、実効性のある法律の制定とその法律の真の運用を促し、モニタリングすること。事例として挙げられたのが、17年前に制定された202030—社会のあらゆる分野において、2020年度までに指導的地位に占める女性の割合を少なくとも30%程度にするという政府目標は、現在、露と消えている!!政府の担当者は責任を問われない現実。(会場から大きな拍手が起こった)

そして、大会の内容の充実さとは裏腹に、「私たち、日本人、女も男も差別、人権、暴力に対する認識の欠如、あるいは鈍さが根底にある」と、指摘されたことに共感した。こうした意識を『タリタ・クム』読者はどう捉えられますか?『タリタ・クム』を愛読し、ジェ



2020 NGO 日本女性大会

私たちは黙らない
女性の権利を国際水準に!

日時: 2020年11月8日(日) 10:00~16:30
会場: 昭和大学 上條記念館 上條ホール
(東京都品川区旗の台1-1-20)
参加費(税込み): 一般 1,000円 学生 500円
申込方法: 裏面のサイトからお申し込みください

中でも、当然に性的指向や性自認(SOGI)に関して、ハラスメントや差別が起こらないようにしっかりと対応を考えなければなりません。全く他人事ではないことを、教役者はもちろん、教会委員や信徒一人ひとりが認識する必要があるのです。

その意味で、パワーハラ防止法で、どのようにパワーハラスメントが定義され、どんなことが SOGI ハラにあたるのかを見ておきたいと思います。

厚生労働省が発表した指針によると、職場におけるパワーハラスメントの定義は、「優越的な関係を背景とした言動」、「業務上必要かつ相当な範囲を超えたもの」、「労働者の就業環境が害されるもの」という 3 つの要件を満たすものとなっています。

また指針はパワーハラスメントを、【身体的な攻撃…暴行、傷害】、【精神的な攻撃…脅迫、名誉棄損、侮辱、暴言】、【人間関係からの切り離し…隔離、仲間外し、無視】、【過大な要求…業務上明らかに不要なことや遂行不可能なことの強制、仕事の妨害】、【過小な要求…業務上の合理性なく能力や経験とかけ離れた程度の低い仕事を命じること、仕事を与えないこと】、【個の侵害…私的なことに過度に立ち入ること】という、6 つのタイプに分類しています。

教会でも、これら 6 つのタイプのパワーハラスメントが起こりうる可能性があります。中でも「精神的な攻撃」は、本当に頻繁に見聞きすることができ、性的指向や性自認に関して、聖書を根拠に、同性愛はダメだと書いてあるとか、異性装は禁じられているというような言説が、まことしやかに

語られるのが、残念ながら現状です。しかし、一般社会的な感覚では、そのような言説を口にすること自体が差別であり、パワーハラスメント、SOGI ハラにあたるのだということを、教会の全ての人が認識しなければならいでしょう。

教役者と教会委員等の立場にある人たちが、やはり教会では優越的な立ち位置にあると考えられますので、教役者会や教会委員会の場などで、性的指向や性自認(SOGI)に関することがらについて、学ぶ機会を設けていただくことは、これからの教会運営のなかでは必要な事柄であるように思います。できれば、他の差別の課題を考えることと合わせて、洗礼堅信の準備の場などでも、性的指向や性自認の多様性の尊重が信仰生活を送るうえで必要不可欠なことを、分かち合う試みがなされていかなければならいでしょう。

アメリカなどでは、性的指向や性自認の多様性を尊重することが、信教の自由を侵害することであるという主張から、同性愛者の平等保護の法律や施策に対して裁判を起こすことがキリスト教会を中心に起こっています。しかし、同性同士では結婚ができないことなど、性的指向や性自認の違いによって、平等に権利を享受できないことこそ、重大な人権侵害であるという認識はもはや国際標準と言えるものです。いまだに、性的指向や性自認の多様性を尊重できずに、LGBT に偏見をもって対応し続けるキリスト教会こそが問題であるという批判に、わたしたちは真摯に応えて行かなければならいのではないのでしょうか。





ジェンダープロジェクトより



前号でもお知らせしましたが、ジェンダープロジェクトに今総会期から新しいメンバーが加わりました。金子登美江さんと永谷亮司祭です。おふたりともジェンダー平等や多様性などの視点を大事にされており、プロジェクトが活気づきそうです。代表も篠田茜から、中部教区の金善姫司祭(新潟聖パウロ教会)に代わりました。一人ひとりが気持ちを新たに、小さくても確かな働きを続けていければと思います。おふたりからの自己紹介です。



アンナ 金子登美江(北関東教区浦和諸聖徒教会信徒)

はじめまして。2019年に国連女性の地位委員会に派遣していただき、SDGs、ジェンダー平等、ダイバーシティ(多様性)、環境問題などに触れ、知らなかったということに気付かされました。また、社会の縮図が教会なのだ実感し、もしや、住みやすい社会の実現には教会の変容から??と感じた次第です。諸先輩方にお教えいただきながらジェンダープロジェクトの活動のお手伝いのできたらと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

司祭 クリストファー 永谷亮(北海道教区小樽聖公会)

はじめまして。司祭の永谷といいます。教会、また社会において共同体に豊かさが増し加えられるためには、一人ひとりの尊厳が保たれること、多様性の顕在化とその保証が重要です。そしてそのための働きを担いつづけてくださっているジェンダープロジェクトの一員とさせていただいたことを感謝いたします。ここでの働きを通じて、私自身もだれか一人のための小さな力になることができたらと思っています。よろしく願いいたします。

女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるという考え方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもあります。タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会

ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3~4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの方が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたく願っています。

タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です(マルコ 5:41)。今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかつた女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。